

社会的判断力の意味

岩瀬 弘 一*

1 はじめに

現在、日本の社会科はまさに揺れ動いている。先の教育課程審議会の答申では、高等学校の社会科は解体され、「地歴科」と「公民科」になるという。その出発の時点で、小・中と高の間に若干のニュアンスの違いがあったとはいえ、戦後40年続いた小・中・高一貫の社会科教育とは何であったのだろうか。私は、学生時代に学んだ社会科の理念こそ、教育の理念であると信じて、社会科教師を志したという思い出がある。その社会科という名称が高等学校から消えるかもしれない。民主主義の世の中が続く限り不滅であると信じた社会科の理念とはそんなに大したことの無い理念だったのだろうか。単なるアメリカ直輸入の主体性のない教科だったのだろうか。このように考えると、社会科の理念について、もう一度具体的に追求してみたくないのである。

ところで、本論文は、「社会的判断力の意味」と題している。これがなぜ、社会科の理念を追求することと結びつくのであろうか。江口勇治氏は、社会的判断力という用語を説明するにあたって、「目標としての社会的判断力は、1968年版学習指導要領で総括目標として示された『公民的資質』の具体的・代理的表現であったと考えられる。」⁽¹⁾と述べている。だとすれば、社会的判断力というものをさらに具体的に追求していけば、そこからおのずと公民的資質の中味、すなわち、社会科が目ざしている理念が見えてくるのではないかと考えたからである。

そこで、本論文では、社会的判断力を、社会科の総括目標としての公民的資質をより具体化したキーワード“Key word”だと仮定して、先行研究を踏まえた上で、社会的判断力の意味をその構造と本質という視点から明らかにしていきたい。

2 社会的判断力に関する先行研究の検討

(1) 「学習指導要領」にみられる「社会的判断力」

社会科教育に関する用語辞典類には、「社会的判断力」という言葉が必ず登場するが、学習指導要領においては、文字通りの「社会的判断力」という表現は、昭和43年版(第4次改訂版)学習指導要領においてのみ使用されている。そこで、この昭和43年版学習指導要領に注目してみたい。

小学校社会科の目標には「社会生活を正しく理解するための基礎的資料を活用する能力や社会

* 熊本県立八代南高等学校

事象を観察したりその意味について考える能力をのぼし、正しい社会的判断力の基礎を養う」⁽²⁾とある。当時の教科調査官であった小林信郎氏がその著書で、社会的判断力を「社会科のねらう根底的で総合的な能力である。」⁽³⁾と述べているように、社会科で育成する能力としては資料活用能力、観察力、思考力があり、それらの能力が基礎となって「正しい社会的判断力」が養われることになる。

一方、第4次改訂時の『指導書(中学校社会)』では、公民的分野で育成する能力として、(1) 社会的事象を的確にとらえる能力 (2) 社会的事象相互の関係を把握し考察する能力 (3) 概念の本質を把握する能力 (4) 社会的事象を公正に判断する能力の4つをあげている。これらの4つが併記されているということは、(4)で述べられている判断力は、(1)~(3)の能力を基礎としながらも、それらとは別の能力であるということにもなる。この点は江口勇治氏も指摘している⁽⁴⁾

次に、高等学校ではどのような表現がみられるであろうか。第4次改訂学習指導要領では、「さまざまな情報に対処し、諸資料を吟味し、科学的合理的に研究して公正に判断しようとする態度と能力の基礎を養う。」⁽⁵⁾とある。ここにも、表現こそ違いますが、基本的には、資料活用能力思考力といった能力を基礎にして社会的判断力を育成しようという考え方がみられる。

では、現行の学習指導要領では、社会的判断力の育成についてはどのように考えられているのだろうか。学習指導要領の記述が簡潔になってきたこともあって、少なくとも「目標」に関する記述の中には、社会的判断力という表現はみられない。私見になるが、教育課程審議会及びそれにもとづく学習指導要領というのは、教育の世界にひとつのブームを造り出しているように思われる。第4次学習指導要領においては能力育成が前面に押し出された。そして、現行学習指導要領のもとでは、「人間性」や「ゆとりと充実」などがブームとなって、社会的判断力の育成についてはあまり議論されなくなった。

しかし、現行学習指導要領が、社会的判断力の育成を軽視するどころか、むしろ最重点目標に置いていることについて、小林信郎氏は次のような説明をしている。「社会科に限らず、すべての教科、領域の基準の改善が、3年間にわたる教育課程審議会の審議の結果としてまとめられた答申(昭和51年12月)の内容に沿っておこなわれたことは改めて述べるまでもない。(中略)答申文を少し注意深く読むと、短い表現ながら、『今回の教育課程の基準の改善は、自ら考え正しく判断できる力をもつ児童生徒の育成を重視しながら、次のようなねらいの達成を目指して行う必要がある。』と述べているのである。したがって、こうした力の育成こそが、前掲の3つのどのねらいにもかかわってくる最重点的な改善の指標になっているとも読み取れるのである。」⁽⁶⁾このように考えるならば、社会的判断力は、現行の学習指導要領においても、社会科において育成すべき根底的な能力として考えられているといえよう。

さて、学習指導要領のいう社会的判断力とは具体的にはどのようなものであろうか。伊東亮三氏の次の指摘に注目してみたい。氏は、第4次改訂学習指導要領について、「ただし、これらの説明において、判断の対象について何も明らかにされていないのは問題をあいまいにする。たんなる社会事象について判断する力というのならば、社会的理解力でも思考力でもよいわけである。どうもその主眼は『正しい』社会的判断力、『公正な』社会的判断力という形容詞にあるようである。ここで、正しいとか公正なことばの内容はよくわからないが、『多くの視点に立』とか『総合的な』というのがその内容であるようでもある。」⁽⁷⁾ 私も大筋においてこの指摘を肯定したい。しかし、学習指導要領のいう社会的判断力が、少なくとも「理解力」と同レベルの能力ではないことはこれまでの考察で明らかであろう。

一方、大森照夫氏は、「正しい社会的判断力」の「正しい」とは、社会通念としての常識なのか、特定の価値観なのか、判断過程の論理的正当性なのか、いずれにしてもあいまいであることを指摘している。⁽⁸⁾

以上述べてきたように、社会的判断力は社会科で育成すべき根底的かつ究極的な能力だということは理解できる。しかし、これが具体的にはどのような能力なのか、あるいは、どんな能力がどのように組み合わせられたものかについては、学習指導要領からは具体的に読み取ることができないように思われる。ただ、前述の「自ら考え、正しく判断できる力」という教育課程審議会答申にみられる表現が、第4次改訂時における「社会的判断力」という表現の発展形であるとすれば、そのへんに社会的判断力の本質を考えるヒントが隠されているような気がする。

(2) 社会科教育学における先行研究の整理

社会的判断力に関する研究は、第4次学習指導要領が出されて以降の数年の間に数多く見られる。中でも『教育科学 社会科教育』（明治図書、1973年、1月号）は、特集として「社会的判断力の指導」を取り上げている。ここでは、社会的判断力をどうとらえたらよいのかについて、先行の研究を整理してみたい。

まず、『評価の改造 社会的な判断力（小学校社会）』（明治図書 1971年）の執筆者の一人である長谷川栄氏は、「社会的な判断力は、これをどのようなものとみるかを規定しなければその評価基準を考慮することができない。社会的な判断力が社会的事象について判断する力であるとすれば、それは〈判断する〉という語をどのようなものとして受けとめるかにかかっている。判断することについてはさまざまな角度から問題にされようが、その本質的特徴は『対象的事態の関係把握』という点に求められよう。つまり、対象的事態における個々の諸事実や、そこに駆使される諸概念などの間の関係をとらえることである。」⁽⁹⁾ と述べている。これは、社会的判断とはどういうことか、という問いに対してひとつの明確な答えを与えたものといえる。すなわち、

「社会的判断」といった場合の「社会的」と「判断」について具体的に言及されているからである。

しかし、「判断する」という語をこのようにとらえることだけで十分であろうか。「判断力」という語の説明を哲学辞典から引用してみたい。「一般に物を正当に認識、評価する能力。判断力は決意を含み、行動への確信となるから、単に知力にとどまらず情意能力につらなる。」⁽¹⁰⁾「判断という言葉は、認識的な意味のほかに、評価(価値判断)という意味を持つから、(中略)事物を評価する能力をも判断力と訳すことがある。」⁽¹¹⁾このように判断力をとらえるならば、社会的判断という場合にも、事実に関わる判断と価値に関わる判断が考えられる。このような観点から社会的判断力を考えた一人に森分孝治氏がいる。

森分氏は、社会科において求められる判断について、子どもによってなされるであろう判断を次のように分類する。⁽¹²⁾

- 事実的判断
 - 個別的判断(例 水島は工業地域である。)
 - 一般的判断(例 工業は、工場をたてる土地が得やすく交通の便のよい所に発達する。)
 - 説明的判断(例 水島工業地域は、工場をたてる土地が得やすく、資源や製品の運搬の便のよい瀬戸内海沿岸につくられた。)
- 価値的判断
 - 価値的判断(例 工業の発達は、人々のくらしをよくする。工業の発達は人々のくらしを悪くする。)
 - 実践的判断(例 経済発展をはかるために企業を誘致すべきである。自然を保護するために企業を誘致すべきでない。)

森分氏は、社会科において求められる判断を以上のようにとらえ、一般的に社会科の目標として「社会的判断力」といわれるのは、「価値的判断」および「実践的判断」に到達しうる能力のことであるとする。社会的判断力についての森分氏のとらえ方は、考えられうる社会科の授業に即してこれを分析した点に意義があると思われる。また、社会的判断力という総合的な能力を構造的にとらえようとしている点は、論を進めていく上で大いに参考になるところである。

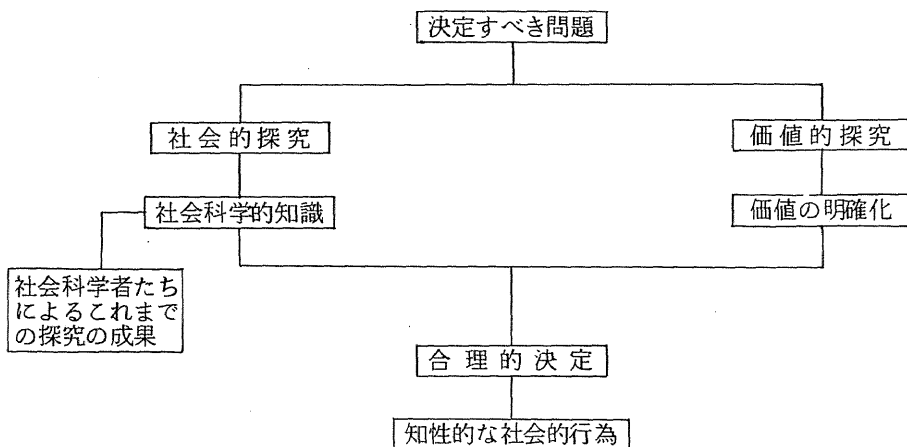
(3) アメリカ社会科における社会的判断力の育成に類する研究の検討

最近のわが国における社会的判断力の育成に関する研究は、アメリカの社会科論の一部にみられる Decision-Making の能力育成の理論を背景にしたものが多い。そして、それらの研究の中で最も多く参考にされているのが、バンクス“ J. A. Banks” の社会科論である。ここでは、バンクスの社会科論の中核的部分を取り上げ、それがわが国の社会的判断力の育成にどのよ

うな示唆を与えているのかを考えてみたい。

バンクスは、自分の社会科理論の創造の背景について、1960年代後半以降のアメリカの国際的国内的諸問題(ベトナム戦争、人種問題、離婚問題、麻薬問題など)を憂慮した後で、次のように述べている。「人間の存在そのものがまさに社会的個人的諸問題の永遠の存在を保証しているといえる。(中略)そして、人類の永遠の存在を保障するような諸決定を下すことのできる技術や能力を育成することが、今や公立学校、特に社会科に与えられた緊急の課題である。」⁽¹³⁾ 彼によると、社会科の目的は「知性的な社会的行為者 “intelligent social actors”」の育成であり、そのために Decision-Making の能力が究極的な能力目標としてあげられることになる。⁽¹⁴⁾ そして、「知性的な社会的行為者」を育成するための授業構成原理として、彼は次のような学習原理を設定する。即ち、「社会的探究 “Social Inquiry”」、「価値的探究 “Value Inquiry”」、「合理的ディシジョンメイキング “Rational Decision-Making”」、「知性的な社会的行為 “Intelligent Social Action”」の4つの原理である。⁽¹⁵⁾

バンクスの4つの学習原理



以上が、バンクスの社会科論の中核となる部分である。バンクスの提案はあくまでも授業モデルの段階であり実際の授業において児童・生徒がどのような思考過程をたどるかについては明らかにされていない。しかし、そのことは差し引いても、バンクスの提唱には日本の社会科教育を考えるにあたって次のような意義があると考えられる。

まず、彼の社会科論は、積極的に価値教育を導入していることである。一般に価値教育といえは、何か特定の価値を注入するかのような感じを与えるが、バンクスのそれは、自由で開かれた

民主主義社会における価値教育のあり方を示唆している。特定の価値を注入することは否定されるべきであるが、「価値自由」の立場に安住したままでいても現実的な問題の解決はできない。目の前に立ちはだかる価値の混乱を可能な限り明確にし、納得のいく合理的な判断、すなわち、知識と価値の総合による価値教育を目ざしているところに、その意義と積極性があるように思われる。また、バンクスの主張する社会科の目的は、児童・生徒が、社会的個人的諸問題を主体的で合理的に解決していく能力、即ち、問題解決能力を育成することであった。彼の場合、いわゆる市民的資質“citizenship”の本質は問題解決能力だといえよう。そして、問題解決能力の核にあたるものがディシジョンメイキングの能力だということになる。わが国における公民的資質と社会的判断力との関連を考える際の参考にしたい。

3 社会的判断力の構造と本質

(1) 公民的資質と社会的判断力の関係

公民的資質の育成が社会科の究極目標であるという点については、ほとんど異論のないところであろう。それでは、社会的判断力は公民的資質の中でどのように位置づけられるのだろうか。

小原友行氏は、「公民的資質の内容については、理解、態度、能力、判断力といったように、いくつかの要素を列挙するだけではそれらが相互にどのような関連を持っているかは明確ではないし、どうなった時に育成されたと考えるのかも明らかでない。その結果として、具体的な授業構成に結びついていかない。」⁽⁴⁶⁾と述べて、公民的資質の内容の構造を次ページのように図式化している。⁽⁴⁷⁾

氏はまた、「問題解決力・社会的判断力の中核をなすものは、意思決定力としてとらえることができよう。」⁽⁴⁸⁾とも述べている。

以上のことから考えられることは、氏が、社会的判断力を問題解決力と同じ意味ないしレベルとしてとらえているということである。それと同時に、社会的判断力が、公民的資質における形式陶冶面のすべてを含む概念、即ち、技能、思考力、価値判断力、意思決定力といった、いわば小原氏流にいえば「方法的能力」⁽⁴⁹⁾のすべてを含む概念としてとらえられているといえる。そして、意思決定力こそが社会的判断力の中核であると氏は述べているのである。このような考えは、前述したバンクスが、ディシジョンメイキングの能力を市民的資質の核心部分であると考えていることと基本的には同じであるといえる。

公民的資質の内容の構造モデル

| 方法 | 内容 | 認知的側面 | | | 情意的側面 | 実践的側面 |
|-------|-------|--|-------|-------|-------|-------|
| | | 社会的事象 | 記述的知識 | 説明的知識 | 価値的知識 | 実践的知識 |
| 認知的側面 | 技 | → (「どのように」「どの ような」過程、構造) ・機能の記述 | | | | |
| | 思考力 | | | | | |
| 情意的側面 | 価値判断力 | → (「善いか、悪いか」「すべきか、す べきでないか」「それはなぜか」価 値判断の反省的吟味) | | | | |
| 実践的側面 | 意思決定力 | → (問題場面では、「何をなすべきか」「ど の解決策がより望ましいか」「それは なぜか」意思決定) | | | | |

(2) 社会的判断力の本質

これまでの考察から、社会的判断力の本質を考えてみたい。

まず、学習指導要領で述べられた観察力、資料活用能力、思考力のいずれにも、判断力は内包されている。その場合、観察力や資料活用能力に含まれる判断力は、いわば分析的判断力であり思考力に含まれる判断力は、総合的判断力である。²⁰⁾しかし、これらの能力は、社会的判断力を支える重要な能力ではあっても社会的判断力そのものではない。森分氏はそのことについて、判断のタイプを「事实的判断」と「価値的判断」に分類することによって説明した。他方、小原氏は、「公民的資質の内容の構造モデル」を説明する中で、「説明的知識を引き出す能力」を思考力だと定義することによって、社会的判断力をもっと上位の概念としてとらえている。両氏が述べるように、社会的判断力の社会的判断力たるところは、「実践的判断力」であり「意思決定力」であろう。そして、このようなレベルの判断の質を高めるために、社会科の授業において何ができるのかという観点から考えた時、これまでに考察した諸能力をばらばらに育成するのではなく、意図的に統合させながら育成することの必要性が生じてくるのである。小原氏の「公民的資質の

内容の構造モデル」は、ある意味では、社会的判断力の構造モデルともいえる。

さて、社会的判断力を育成するにあたって、社会科は、社会的事象を理解させる教科であるから、社会的事象相互の関係をきちんと把握させることが社会的判断力を高めることになるという考えが出てきたり、他方では、社会的判断とは、判断者の生き方にかかわる問題であるから、価値の問題を抜きにしては考えられない、したがって、価値の主体的選択能力、あるいは、何をなすべきかという実践的判断力を高めなければならない、といった考えが出てきたりする。私は、前者と後者の考えを対立的にとらえるべきではなく、むしろ不可分の課題として考えていくべきだと思う。再び、小原氏の論にもどるが、氏の「公民的資質の内容の構造モデル」における「方法的側面」（形式陶冶面）と「内容的側面」（実質陶冶面）は表裏一体のものとしてとらえるべきものである。前述の「モデル」において、それぞれの側面における「方法的能力」は、それぞれの側面における「知識を引き出すための能力」として位置づけられているが、同時にそれらの能力は、それぞれの側面における内容（知識の習得）の広まり、深まりとともに高まっていくとも考えられよう。即ち、判断力という能力もただそれだけで発達するものではなく、知識や理解と不可分の関係において発達すると考えるべきであろう。

最後に、判断の本質についてと思われる上田薫氏と山田勉氏の言葉を吟味しながら、社会的判断力について、私なりの定義を試みたい。「社会的判断力というものを、あくまでも個性的なものとして、いわゆる学問や教材から人間の中にとりもどしてもらいたい。それは端的にいえば、判断というものにスリルを感じることなのである。判断とは賭けだということ。(後略)」⁽²¹⁾「判断は、未来の方向選択のふみきりとなるものである。(中略)このことは、ひとつの判断が未来から裁かれるということでもある。」⁽²²⁾両氏の主張にみられる共通点は、判断というのは個性的である。また、未来から裁かれるがゆえにひとつの賭けであり、したがってそこにはスリルというものが感じられるはずである。ここに判断の本質がある。

私は、前述のバンクスの提唱したディンジョンメイキングという言葉をあえて日本語に訳さなかった。今、これに日本語を与えるとすれば、「自己決定」と訳した方がその本質を言い当てているような気がする。判断とは、孤独を感じながら、未来に対する〈自己〉の生き方を〈決定〉することにほかならない。伊東亮三氏が述べたように、「ディンジョンメイキングの能力が社会的判断力に近い概念である」⁽²³⁾ならば、教育用語としては「自己決定」と訳した方がよいと考えるのである。このように考えれば、社会的判断力とは、「社会認識にもとづく自己決定力」だとも定義できるであろう。

〈注〉

- 1) 大森・佐島・次山・藤岡・谷川編『社会科教育指導用語辞典』教育出版, 1986年, p. 74
- 2) 文部省『小学校学習指導要領』(1968年版)
- 3) 小林信郎『社会科研究入門』明治図書, 1969年, p. 36.
- 4) 大森・佐島・次山・藤岡・谷川編 前掲書 p. 74.
- 5) 文部省『高等学校学習指導要領』(1970年版)
- 6) 大森・小林編『中学校学習指導要領の展開 社会科編』明治図書, 1980年, p.p. 13~14.
- 7) 伊東亮三「社会機構と結びつけた判断力の育成」『教育科学 社会科教育』明治図書, 1973年, 1月号.
- 8) 大森照夫『新社会科教育基本用語辞典』明治図書, 1986年, p. 43.
- 9) 山田・長谷川(他)『評価の改造 社会的な判断力(小学校社会)』明治図書, 1971年, p. 10.
- 10) 『哲学辞典』平凡社, 1971年, p. 1128.
- 11) 栗田・古在編『岩波哲学小辞典』岩波書店, 1979年, p. 187.
- 12) 森分孝治「知識・理解力と社会的判断力との関連」『教育科学 社会科教育』明治図書, 1973年, 1月号.
- 13) J. A. Banks. Teaching Strategies for the Social Studies - Inquiry. Valuing, Decision - Making, Addison - Wesley. 1973年, p. 12.
- 14) Ibid., p.13.
- 15) Ibid., p.29.
- 16) 小原友行「公民的資質の育成をどう変えていくか」『社会科教育の21世紀』明治図書, 1985年, 所収, p. 125.
- 17) 前掲書, p. 126.
- 18) 前掲書, p. 126.
- 19) 「認知的, 情意的, 実践的」知識を引き出すための能力という意味。
- 20) 森分氏は, 社会科において判断力という総合的な能力が問題とされる時, 「説明的判断」に到達する能力も意味する場合もある, と述べている。
- 21) 上田薫「判断力の個性と全体性の関連」『教育科学 社会科教育』明治図書, 1973年, 1月号.
- 22) 山田・長谷川(他), 前掲書, p. 16.
- 23) 伊東亮三, 前掲誌.